本資料は（一財）社会変革推進財団との業務委託契約に基づき、SIMIの責任において制作されました。原著の著作権は当該資料を作成した作者にあり、日本語化された資料の著作権は（一財）社会変革推進財団及び（一財）社会的インパクト・マネジメント・イニチアチブにあります。
(https://simi.or.jp/grc/purpose-of-capital/)

THE PURPOSE OF CAPITAL
Elements of Impact, Financial Flows, and Natural Being
By Jed Emerson
Blended Value Press, 2018

資本のパーパス（存在意義）
インパクト、金の流れと自然なる存在について
著：ジェド・エマソン

第 2 章

インパクトについて：無知なインパクトから互酬のインパクトへ

資本のパーパス（存在意義）についての伝統的な考え方は、資本と資産ポートフォリオに おいてその量を増殖させるためのツールであるということです。

したがって、従来の投資の場では、積極的な資本投資／運用戦略からいかにして投資のアルファ（超過リターン）を生み出すかを考え、金融資本を増やすための方法に焦点を当てるのみで、金融の外にある資本のパーパスに向き合うことはありません。先に述べたように、資本のより大きな「なぜ（WHY）」ではなく、投資的な「どのように（HOW）」に焦点を当てることは、多くの関係者や受託者にとってより重要で本質的な目標、ひいては私たちがその一部であるコミュニティや社会の目標の実現を脅かすのです。本稿では、パーパス（存在意義）と自己の問題を取り上げていますが、資本がお金に限ったものではないことを理解するためには、まず、資本の目的は、それ自体の増殖や際限ない投資収益を生み出すことよりも高度なものであることを理解する必要があります。資本のインパクトについて、私たちはどのように理解しているのでしょうか。

無知なインパクト

インパクト投資という言葉が投資家やフィランソロピーのコミュニティに広まり始めた頃、長年にわたって責任ある投資やコミュニティ投資を推進してきた人々は、やや憤慨し少なからず否定的でもありました。「すべての資本はインパクトを生む！」だなんて、「私たちはもう何年もそうやってきたのに…」と言っていたでしょう。もちろんそれは正しく、すべての資本はインパクトを生みだし、先駆者たちは実際に何年もかけて、投資を通じて、彼らが理解するポジティブなインパクトを追求してきました。しかし、現在インパクト投資とよばれている分野に参入した初期の投資家たちが言おうとして

いたのは、自分たちの投資と、草の根レベルの意味のある意図的なインパクトの創出をできるだけ直接結びつけることでした。そして彼らの選択可能なオプションのなかに、測定可能でエンゲージメントを内包するインパクトはなかったのです。

もちろん、すべての資本はインパクトを生みます。しかし多くの場合、その目標は投　資の管理や運用に偶発的に左右されるものでした。それは投資の副産物として生み出されたインパクト——特定の価値を追求するというよりも、ふるい分けや値段の結果——であり、当時インパクトが自分たちの活動の中核であることを認識していた、サステナブルで責任ある投資を推進していた人たちにとってもそうでした。現実は、ほとんどの投資家にとっては、雇用創出、納税、広い意味での社会的価値が投資が生んだインパクトであるとの理解にとどまり、4年ごとに「福祉ではなく、雇用を」などと唱えて、自己満足に浸るためのものでした。このようなアプローチは、「GM（ゼネラル・モーターズ）にとって良いことは、アメリカにとっても良いことだ！」という考え方をインパクト投資にあてはめているといえるでしょう。善意は歓迎すべきですが、主流の投資家の多くにとって、投資によるポジティブなインパクトは過去にも（そしてインパクト投資の名を冠している人を含む、多くの人にとっては今でも）、富や利潤、個人的な利益の追求の二の次でした。

社会や環境にポジティブなインパクトの意図的な創出にとって、私たちが無知の世界に漂っていることは大いなる不幸といえます。ときに洞察に至っても、すぐに思い込みの知識や認識の霧の中に消えてしまい、ふたたびさらなる無知のレベルに堕ちて、同じことを繰り返すのです。どんなに美辞麗句を並べても、今の世の中では、資本が生み出すポジティブなインパクトのほとんどがこの無知に起因するものであり、意図的な洞察に満ちた戦略の結果ではありません。

名だたる思想家、哲学者、科学者たちがこれまでに様々な方法で証明してきたとおり、私たちは、自分と「他者」を隔てるものが幻想であることを知っています。この瞬間、そしてすべての瞬間に、私たちは皆つながっています。私たちは、人類、コミュニティや社会、そして家族の一員としてもっとも純粋な形で結ばれています。しかし、それだけではなく、自然における物理的な存在、そして生命の力と死によって私たちは結ばれているのです。この真実を見ずに、私たちはあたかも、それぞれが独立した個として別々の道を歩んでいるかのようにふるまっており、それはある意味では正しいのですが、別の意味で「真実」ではありません。私たちは、この無知と否定のベールに隠れて毎日暮らしているのです。

この現実が、この世の中でインパクトを追求することをとてつもなく困難にしているのです。私たちは知っていると思いこんで、そのよう行動するのですが、実際には知ることはできないのです。なぜなら、知るということと真実は、それぞれ反復的で一過性の現象に過ぎないからです。私たちの真実についての知識は、私たちの無知と対峙しているのです。でなければ、私たちは真実を、それが静的であれ動的であれ、知ることをやめてしまい、一定の確信を持って理解することができなくなってしまいます。私たちは何かをするために行動しなければなりません。私たちがすることが十分ではなく、正当でもなく、おそらくその場においてだけ「正しいこと」でしかないとわかっていてもです。エビデンスにもとづき、客観的な分析を行い、明確な戦略にもとづいて行動しようと努力しても、結

局は最終的な結果を知ることができていないまま行動することになります。私たちは、自分たちの行動に意味があり、世界の中でポジティブな存在であると信じたいのですが、自分たちの行動の長期的なインパクトを知ることはできません。

私たちの努力によって救われる命とは、
・戦争で荒廃した国々や壊滅した地域社会から救い出された子どもたち？
・職業訓練を受けている貧しい家庭の稼ぎ手？
・投資先の画期的なベンチャー企業を経営する若い女性？
のどれでしょうか？

このうちのどの人生が、私たちを新しい道に導き、世界に光をもたらす経験となるのかを知ることはできるのでしょうか？

それとも、私たちが救ったその命は、オルタナ右翼の新しいリーダー、分断を叫ぶ将来の声、あるいは大統領の権威主義的傾向の単なる受動的支持者へと進化する運命にあるのでしょうか？

私たちは情熱と信念を持って行動し、自分たちのすることが正しく、集団として正しい方向に進んでいると信じています。しかし、ほとんどの場合、私たちが関心を持ち、その人生にコミットしていると公言している人々の生活や現実を意識することなく行動しています。時には、ことが終わってから振り返ってみたときに身がすくみ、自分の行動がいかに信じられないほど見当違いであったかを知り、運が良ければその程度で済んだことを知るのです。

ほとんどの場合私たちは、自分の人生や決断したこと、あるいはしなかったことを正当化するために、自分の行動に理由付けをします。結果が出なくても良いと思ってやったことなのだし、その意図が大事なのだからと自分に言い聞かせています。善意が敷き詰められた道を歩きながら、頑張ったのだからそれで十分じゃないか？私たちの慈善の対象者から話を聞いたり、彼らの長期的な経験を把握したりする必要や、インパクトを目指す自分たちの行動はそれだけで正しいのだから、それが意図的にせよ偶発的にせよ、彼らに高度なインパクトを与えているのかどうかの説明責任を負う必要はないのだ、と。ポジティブなインパクトを目指すことが私たちのライフワークなのだから、謙虚さや自己を疑うことはいらない。そう、すべては好調——インパクト・レポートにもそう書いてあるし、私たちを取り巻く、資本を称賛しそれに群がる人たちにも同じことを言われます。

具体的な話をしましょう。個人的な話をしましょう。
私は 25 年以上前に、社会課題解決のスタートアップ事業に資金を提供しました。その事業は規模を拡大することができませんでしたが、更生施設を出たばかりのひとりの若者に同様の社会的事業を立ち上げるきっかけを与え、彼のソーシャル・ベンチャーは、莫大な収益を上げているだけでなく、死ではなく生きる道に戻ろうとする多くの若者に橋渡し的な雇用の機会を与えています。彼の出発点となった事業の成功は限定的であったし、彼の事業の長期的なインパクトについては全く予知しなかったにもかかわらポジティブとみなされるかもしれません。

一方、35 年前に私が立ち上げた非営利団体は大きな成果をあげ、何百人、いや今では何千人にのぼる元ホームレスの若者たちが路上生活から脱出し、より良い健康的な生活を手に入れる機会を提供しています。しかし、この私の事業は、少なくともひとりのカリスマ的な 10 代の若者を失望させ、彼は両親の家の前庭の木から首を吊ったのです。

私たちのインパクトへの取り組みが取りこぼしたのは他に誰がいるでしょうか？私たちの多くの欠点が少なくとも部分的な原因のために命を落とした人は他に誰がいるでしょうか？これらのインパクトの結果は、大きな勘定の中では清算されているのでしょうか？私たちは、どのようなレベルのインパクトの達成においても、自分たちの行動に関しては最終的には無知なのです。それなのに、私たちはポジティブなインパクトを推定し、その逆についての知識の探求を手放しています。しかし誰が私たちを責めることができるでしょうか？これが私たちのライフワークで、私たちの人生は良い人生、有意義な人生、抑圧された「他者」の名のもとに生み出された、意味と目的のある人生でなくてはならないのですから。

伝統的な投資と現代の金融資本主義のシステムは、資産所有者または受託者の視点にもとづいていますが、インパクト投資の本質はこのような自分中心の視点から見ることではありません。自分の視点、優先順位、財務的な目標や目的のための計画にもとづき、不変で予測可能な投資戦略、戦術、運用方法が中心にあるものではないのです。インパクト投資とは、この世界や私たちの社会について今日信じていることを超えて、私たちの未来の人生やその意味について、包括的な正しい歴史認識にもとづく啓かれた刺激的な視点を受け入れることです。それは、資産管理と資本運用において新しい投資手法を実施することなのです。四半期ごとではないそれを超越した意図、キャッシュフロー予測や SROI スプレッドシートで予測可能なものではない、より希望に満ちた変革をもたらす意図をもったものなのです。

インパクト投資とは、世界、コミュニティ、資本、そしてもしも運が良ければ最終的には自分自身が、この先変わることができるのかどうか、ということなのです。インパクト投資は、資本のパーパスを探求する入口です。なぜなら、世界における資本の役割とパーパスについての今の私たちの考え方では、地球のそして人類の前に立ちはだかる課題に立ち向かうのに適切でもなく十分ではない、という理解から始まるからです。インパクト投資とは、単に自分の資本と価値観を一致させることではなく、資本と価値についての経済的な理解だけでは、資本と価値が何なのか、そして何が必要なのかということが分からないのだと認識することなのです。私たちには、より深く掘り下げ、金融資本主義が求める単純な計量経済学以上の考察を行うことが求められています。このように、インパクト投資は私たちを、今、与えられている世界から、現実として理解しているものを超えて、未来に創造しようとするものへと進化する道に導きます。最初は無知であることを受け入れる低姿勢が求められますが、その無知を超えて、私たちが創造しようとする価値が内包する多くの複雑さを真摯に理解し、少なくともこれまでどのように人生や資本を管理してきたのか、もしくは今しているのかについての理解から、淡々と積み上げていかなければなりません。

それぞれのインパクト投資戦略の種類や形態、性質にかかわらず、このことを念頭に 置いておくとよいでしょう。

我々は無知なのです。

でも望むことはできます。私たちは、世界における私たちのインパクトをはかるためのツール、メトリックス、定義や管理情報システムを作りだすのかもしれません。しかし究極的に、私たちのすべての努力は粗末な無知を背景に行われるのです。私たちが「他者のインパクト」を推進する

とき、「互酬のインパクト」の創出を希望するとき、私たち一人ひとりが、自分たちの願望と主張についてより謙虚になることが必要でしょう。

「他者のインパクト」とその構成要素：広さ、深さ、互酬性

インパクト投資における基本的なコンセプトは、ある資産ポートフォリオにおいて資本は様々な資産クラスにまたがって運用され、また、幅の広い資本に対する一連の戦略を通じて運用されるということです。この範囲は、フィランソロピー的なものから、市場に近いもの、そして金利市場への投資を含みます。このようなアプローチでのポートフォリオ構築の実践については、他の著作でも紹介されていますので、ここでは「トータル・ポートフォリオ・マネジメント」とは、資産クラスに応じた適切な投資リターンを追求するとともに、各投資先が生み出すインパクトの性質や形態を最適化することであると認識しておきましょう。

もう一歩踏み込んで考えると、インパクト投資におけるテーマをいくつか見つけることができます。そのテーマは、コミュニティレベル（低所得者向けの住宅の建設、従来主流の金融機関が見落としていた中小企業への融資資金の提供など）から、対象人口レベル（ジェンダーレンズ投資、様々な人種・民族グループを対象とした投資、低所得者を対象とした投資など）、環境レベル（保全のための地役権、ランドバンキング、グリーン債など）まで多岐にわたります。他にも、健康とウエルネス、教育などのテーマがあるでしょう。このような多様かつ広域なインパクトを目指すテーマが例えば高度 1 万フィートであるとすると、「儲かりながら良いことをやる」という、最も漠然としたインパクトは高度 5 万フィートレベルと言えるでしょう。その中間（高度3 万フィートとでも言うべきか）には、「他者のインパクト」があり、それには以下の 3 つのタイプのインパクトがあります：「広いインパクト」、「深いインパクト」、「互酬のインパクト」です[i]。

私たちは、それぞれが高低様々な程度の富を手にしていてその資産を所有しているのだと考えがちですが、個人が一時的に資本を所有していても、その資本は本質的にはその人のものではありません。富の存在意義が、その一時的な所有者のニーズを超え、資本そのものの増殖が優先されるという表層的な理解、つまり、富の目的はその個人のためだけに増えていくことがすべてである、という理解を超えるにはどうすればよいのでしょうか？

資本のパーパスは、すべて「自己」の外にあるものへ与えることによって、あなた自身が充実し、自由で意義深い精神的な生活を送ることである、という可能性を考えるのはどうでしょうか。あらゆる側面における人間と環境の劣化は、あなたが生きたことの価値をも下げ、そのうちに最も充実した形で生を経験する能力を奪うことになるでしょう。結局、富の価値とは、すべての人にとって最高の価値を創出しない限り、意味のないものであると言えるのかもしれません。いずれ自分自身に跳ね返ってくるのですから。資本のパーパスは、それぞれがその一部でありながら、でも独自に

定義したり操作はできないコミュニティの身体に健全な血液の循環を維持することです。すべてのインパクトは、「他者のインパクト」に織り込まれています。

このようなインパクトの理解が、常に立ち返るテーマです。とりあえず今は、お金を持つことの目的は、結局のところ、その富を「自己」ではなく「他者」のために管理しているのかもしれない、という考え方に立ってみてください。そして、その「他者」が誰で、何であるかという境界線をより遠くに置けば置くほど、生きている間により大きな複合的価値（blended value)を生み出すことができるでしょう。資産をこのようにより効果的に運用することで、資本をどのように配分するのが最善かということが分かります。生まれるリターンについてもより深く理解することができることで、ひとつの人生が生み出せる経済的かつインパクトの最も大きなリターン、つまり最も有意義な価値の創出を可能にするのです。

ひいては、何が「自己」の境界であるのかという定義を広げることで、単に自己の利益のためだけに投資して死ぬよりも、「他者」への投資を通じてより豊かな最期を迎えることが ￥できるのです。

想像してみてください…

例えば、経済的な正義とより公平な社会を目指すために、特定の企業や投資先、戦略に投資することで、より良い企業活動や雇用の増加を支援することにつながるかもしれません。この投資は、経済の循環の中で他の企業にも利益をもたらし、それがあなたの利益にもつながり、あなた自身だけでなくすべての市場参加者にさらに大きな利益をもたらします。こうして 輪が回っていきます。

とても単純なことです。

レイト・マシューズはこう言っています。

「自己中心的な視点で世界を見ることは、要塞の門の覗き穴に自分の視野を限定するようなものだ。それはとてつもない仮定にもとづいているのに、それがどれほどのものであることに気づいていない。他意はないように見えるが、それは、自分の存在が独立して継続し、防御可能である、あるはずだという仮定にもとづく。私と私のものは個別に独立した存在であるという信念は、その個別の存在を支えるためのすべてを正当化するものである。この仮定は、世界を恐ろしい場所にし、私たちを囲い込む。また、利他主義を、「私」を永続させるという主目的からの踏み石や気晴らしに過ぎないものにしてしまう。」[ii]

この逆が、もっとも広い意味における「他者のインパクト」なのです。

「他者」の起源

私たちの「他者」に対する理解は、時とともに進化してきました。[iii] それは、これからの変 化に「他者」が果たす役割に対する理解が、今後の人生の中で築き上げられて行くということでもあります。コロンブスはインディアンを「植物や動物と共に博物学者のコレクションに っている…」ような「他者」と見下し、コルテスは先住民を人間であると認めたものの、彼らを単なる「物品の生産者としての職

人、またはそのパフォーマンスを賞賛する曲芸師としてみなし、その賞賛は両者の間の距離を消すものではなく強調するものであり、彼らが「自然の珍現象」のひとつであるということには変わらなかったのです」[iv]。

「他者のインパクトは、その「他者」との関係に焦点をあてるもので、暫定的な目標達成を評価するために測定する成果、例えば創出された雇用の数、そのコスト、費用対効果分析といった評価にもとづくインパクトではないのです。非営利セクターでは、インプット、アウトプット、アウトカムという言葉を使います。「他者のインパクト」は究極的なアウトカム、つまり他のすべてを超えたものであると言えるでしょう。

「他者のインパクト」は、「広いインパクト」、「深いインパクト」、「互酬のインパクト」の 3 つのレベルで展開されますが、最初は家族という観点から考えてみるのが一番わかりやすいかもしれません。

あなたはある程度の富を持っており、従来の金融的な意味で上手に管理しています。あなたがそれをどのように扱うか（それに取り組む真摯さ）、そして自分の子どもたちにいくら残し、応援する組織にいくら寄付するのかは、資本のパーパスの本来の働きです。それはいわば、「他者のインパクト」の分かりやすい初段階であり、自分の人生や個人的興味のすぐ外側にあって、愛する家族の生活や価値とともにある、いわばすぐ手の届くところに生る果実のようなものです。

この最初のインパクトのレベルでは、自分や親戚の子どもが学校（小学校、中学校、高校や大学）に通えるようにお金を出しますが、いずれにしても、この家族はあなたと直接つながっています。このインパクトは家族中に明快で、あなたのお金がどこに使われているのかも分かっています。質の高い教育が自分の子どもに多大な影響を与えることが分かり、卒業式に出席すると多くの子どもたちが教育を受けるために苦労していることを知りました。そこで教育費を必要としている人たちのための奨学金制度を創設することで、「他者のインパクト」の最初の段階から活動を拡大することになります。そのうちに、資金やスタッフが充実した学校の存在も重要であることに気づき、国内のさまざまな学校に寄付金を投じ、結果としていくつかの建物に自分の名前が刻まれましたが、これらの学校のインフラにも大きく貢献し「他者のインパクト」の領域を拡大し「広いインパクト」に達しました。

これは、自分の富の使い先としては悪いことではありません。「他者」の人生に良い影響をもたらすために小切手を送ることはわずかな手間ですし、大学に寄付することで減税という形で経済的な特典を受けることができます。

さらにその後、公教育は主たる公民権であるという意見を支持するにいたり、すべての人に教育の機会を与えるための公共政策実現に資金を提供すると同時に、休日には公立学校で子どもたちに家庭教師をするボランティアをすることにしました。時間が経つにつれ、彼らの人生の一部を共有し、自分自身の来し方を振り返り、自分の人生、他人の人生、そしてより大きいコミュニティの在り方を豊かにする「互酬のインパクト」により深く関わっていることに気づくでしょう。

おめでとうございます！インパクトに満ちる人生が実現しました！

「広いインパクト」は予防接種促進プログラムがもたらすインパクトであり、「深いインパクト」は、大きな保健・福祉の公共政策と制度整備の一部としてのコミュニティ向けのプログラムといえます。「互酬のインパクト」はこのふたつに加えて、立案とサービス提供のプロセスに自分自身が深くかかわることで実現します。それは、インパクトを与えようとしている人々のみならず、自分自身も変わろうとすることです。

対照的な「安易なインパクト」

1940 年代にドイツの神学者ディートリッヒ・ボンヘッファーが「安価な恵み」という概念について書いています。安価な恵みとは、イエス・キリストを信じると言うだけで、クリスチャンとしてふるまい神の慈愛を受けれられるという考え方です。しかし、ボンヘッファーは著書「The Cost of Discipleship」[v]の中で、安価な恵みに甘んじるのではなく、クリスチャンであることの代償と犠牲をより深く理解するべきだと説いています。この信念にもとづき、ボンヘッファーは安泰な神学者としてのアメリカでの職を辞し、第二次世界大戦末期のドイツに帰国し、教えながら信仰を自ら体現する活動に従事しました。連合軍がフランスを通過してドイツに近づく頃、ボンヘッファーはナチスに投獄され、その後処刑されました。彼の死からわずか 2 日後、彼が収容されていた施設は連合国によって解放されたのです。

ボンヘッファーは「互酬のインパクト」の人生を送りましたが、私は自分が彼を真似 する勇気があることを祈るばかりです。この先、そのような機会があるかもしれません。

ひとりの人生から目を移して投資の話をすると、ポートフォリオにおけるそれぞれの投資戦略はいろいろな形やレベルのインパクトを生み出します。公募証券は流通市場で取引されるため、そこへの投資は、たとえばマイクロファイナンス債と同様な直接的な草の根レベルのインパクトはもたらさない、という主張があります。しかし、上場企業に投資するということは、株主決議に参加したり、従業員や地域社会に直接影響を与えるさまざまな企業活動について経営陣と議論を交わしたり、世界中の何千人もの従業員と数多くのコミュニティの生活に有意義な変化をもたらす多くの提案に企業と共に取り組めるということです。公募証券はインパクトを生まないということではありません。その資産クラスや投資戦略に適した、特定の種類と形のインパクトなのです。それは「広いインパクト」です。

今日、従来の主流投資家が、彼らのコアビジネスである、健康、通信、テクノロジーなどの分野においてインパクトを生んでいると言っているのを耳にします。彼らは、投資家や経営者の意図とは関係なく、これらの分野で社会的、環境的価値を全体的に高めているからだ、と言います。このアプローチは、偶発的な、あるいは「安易なインパクト」に過ぎず、例えば数年前、「緑の革命」の推進のためイランの活動家を組織化するのにツイッターが使われた、というのと同じことです。ツイッターは確かにその SNS プラットフォームを介して大きなインパクトを生みました。しかし、このプラットフォームでは、人々が最近飲んだラテや夜あそびについてツイートすることもできます。別の例を

挙げると、アメリカのある指導者が、抑圧的な嘘や破壊的な考えを支持者に広め、他の市民、移民、宗教団体、ジャーナリスト、あるいは国の中のさまざまな「他者」に対する暴力や怒りを煽ることもできるのです。ツイッターが生む、ポジティブとなりうる社会的価値は、会社が定型のビジネスモデルを推進することによって偶発的に生まれたものです。持ちうるインパクトの成果を、意図的に創出、推進、管理しようとするものではありません。

電気の供給や携帯電話の電波塔の設置は、私たちの世界に良いインパクトを与えるのでしょうか？もちろんです。しかし、これは現状維持に挑戦したり、正義や制度の変革を進めたりしない、安易なインパクトの一形態にすぎません。つまり、そもそもインパクトが必要であるこの世界の根本的な問題に取り組もうとするものではないのです。変化を促進するか、不公正な世界の現状を維持するか、どちらにでも向かえるのです。企業は正の社会的インパクトを生み出すことができるのでしょうか？できます。では、いつもそうしていて、また一定の意図とコミットメントによって、その目的のために運営されているのでしょうか？そんなことは全くありません。インパクトを生む可能性は存在するのですが、ファンドや企業はそのインパクトの可能性を引き出そうとはしていません。これは「広いインパクト」の一形態です。だからといってどうしようもないインパクトではなく、ただ、より公正な世界を実現するにあたって、その長期的価値を過度にアピールすべきではないということです。このような広い安易なインパクトを宣伝するときには謙虚な姿勢で行う必要があるのです。

カーニバルのお祝いはもともとキリスト教の受難節（レント）に備えるためのものでしたが、このお祭りが世俗化されることで、単なるパーティー、己の傲慢さを過度に飲んで酔っぱらう自己中心的などんちゃん騒ぎになってしまいました。こうにして、祭りの精神は失わ れ、「大衆」によって貶められてしまいました。今インパクト投資に参画しはじめている多くの人たちにとって、それは単なるパーティー、つまり投資家たちが最大の投資収益とそれにともなう物質的な恩恵を手に入れることの喜びの解放であり、投資による潜在的な大きなインパクトや、お金以上のために資本を動員することの真の意味についてはまったく考えていないのです。このタイプのインパクト投資家はこの先、朝起きると、ありあまる金とわずかな反省という酒による二日酔いから目を覚まし、残っているのはわずかな収益と満たされない人生になってしまいます。それは彼らにとって不幸なことであるだけでなく、私たちすべてのインパクト投資家にとっても不幸なことです。

一方、「深いインパクト」は、企業や組織、投資家の事業戦略の中核をなすものとして戦略的に管理、推進されます。それは、標準的なビジネスモデルを実践する企業が経済的価値の創出を目指す中でたまたま社会的もしくは環境的にポジティブなインパクトを生むということではありません。「深いインパクト」を実現するためには、一定の認識、自覚、そして慎重な実行が求められます。それは意図的かつ有意義で、社会的や環境的な価値は経済的な価値創出を求めることに内包されていることを認めるものにとどまらず、外部のステークホルダーや関連するコミュニティに利益をもたらす価値の要素や側面を高め、育て、推進する戦略的な取り組みなのです。

この重要な活動においては、サプライチェーンや労使関係を深く掘り下げ、企業やポートフォリオの中にぼんやりと埋もれている潜在的なインパクトを掘り起こし、従来の事業計画や標準的に定められた投資収益の追求を超えて実を結ぶことが求められているのです。私たちの目の前に

は、私たちの一生の仕事や世界中の資本の動員を通じて、より意義深い価値の実践に取り組み、推進していく機会があるのです。インパクト投資は、様々なステークホルダーと協力して「広いインパクト」を創出し、「深いインパクト」を実現するためのツールであり、「互酬のインパクト」のレベルにおいて、一人ひとりが充実した取り組みを可能にするので す。

互酬のインパクトについて

「互酬のインパクト」とは、私たちの「生」における完全なつながりの実現と、私たちが目指す価値の追求において求められる「自己」と「他者」とのつながりであり、結びつきです。それは、私たちと「他者」をつなぎ、自分を真の自己とより深くつなぐインパクトです。

「互酬のインパクト」とは、私たち自身、その一部を成すより大きなコミュニティ（その規模に関わらず）、そして私たちが境界や分断なく属する偉大なる「生」と生態系の間の絶え間な い流れのことです。ロンドン・ビジネススクールのドミニク・ホウルダーは、こう言います。

> 「自己と他者、人類と世界の間の裂け目をとじることは、私たちが今生きている時代の中心にある優先課題でなければならない。少し前までは、私たちはお互いを避けることができた。異質で忌まわしくもある宗教や習慣を持つ地球の裏側の貧しい地域は、目に触れることなく無視できた。しかし今、彼らは私たちをはっきりと見ることができる。
>
> 彼らは、私たちの桁違いの富や、彼らが最も大切にしていることに致命傷を負わせる私たちの価値観や行動を知っている。そして今、私たちも彼らを見ることができる。グローバル化された経済は、グローバルな旅行、グローバルなメディア、グローバルなブランドを通じて、お互いを近づけた。しかし、それは物理的な近さでしかなかった。人としての相互理解と共感における距離は、依然として息を呑むほど遠い。」[vi]

「広いインパクト」には一定の価値があります。それは世界のどこかでポジティブになりうるインパクトを創出し、促進するからです。しかし、それは、距離を置いた新たな関係性を紡ぐことのないもので、良いことではあっても、怒りのあまりくり出したパンチが幸運にも命中したり、優秀でない学生が幸運にも 5 つの回答選択肢の中から 1 つの正解を選んだというのと同じ意味の良いことに過ぎません。

私たちが目指すのは、偶発的にインパクトを生むことではなく、愛を育むのと同様に、「他者」とのパートナーシップの中で、道を歩み始めたとき以上のものを創り出すことなのです。私たちは満足感と悟り、そしてインパクトを、何もしないのではなく計画性と目的をもって達成するのです。もちろん、もしも偶然によってでしか手に入らないのであれば、それはそれでもちろん構いません。しかしそれは、より大切な成長のプロセスにおいて、自分自身やコミュニティの内にインパクトを見つけるのとは違います。「広いインパクト」は、「深いインパクト」ましてや「互酬のインパクト」とは異

なり、そこに必然的に内在する価値はありません。

ピルケ・アヴォート（ユダヤ教の書物、「Ethics of Our Fathers」には、トーラ（翻訳注：ユダヤ教の律法）に到達する（トーラの霊的な力と結合することを意味する）ために必要な 48 の（ミドットと呼ばれる）人間の性質が示されています。どの性質もそれぞれ重要なのですが、

> 「…ラヴ・シムハは、『仲間の重荷を背負うこと』がすべてを超えて目指すものであると言っています。そこに到達することは、人間の本能が死さえも超越した霊的なものに変化したことの証明である、と。トーラの霊性が説くのはこの生まれ変わった無限の魂であり、その無限性は他人の痛みを背負うことで得られのです…このトーラの解説が意味するのは、閉ざされた自己と他人との関係が、有限と無限、そして私たち一人ひとりと神との間をつなぐものであり、それはお互いへの責任を全うすることで実現するということです」[vii]。

「互酬のインパクト」は、「自己」と「他者」の分断が消滅したとき、お互い同士と地球との関係、資源と最終的なアウトカム、本当の目的地と最終的な現実への理解、それらすべてが一つに絡み合っているという認識に至るときに実現するのです。私たちは皆、私たちが創り、創り続ける現実の一部なのです。

私たちが人生で求める価値とは、ヒュームの利己的な方法によって、実際の事柄に相対的に記録され評価される価値にとどまるのではありません。「互酬のインパクト」とは、一 生を通じて「他者（インパクトを生む対象となる人々）」や地球（富の源であり、私たちが根ざしているところ）との関係の中で実現される価値の統合です。そしてそれらは、コミュニティや社会、地球とその多様な生物やエネルギーに対峙する私たちの存在と、時を超えて結び ついているのです。

「互酬のインパクト」は、社会変革のグローバルな流れや、自然や人間のエネルギーに向けて私たちを開放します。

「互酬のインパクト」は、スピノザが実体と呼び、他の人が神や霊と呼ぶものと私たちを結びつけます。

「互酬のインパクト」は、私たちが資本の究極的なパーパスとして実現しようとしているものを求め、関わり、それとともに在るためのもっとも本質的な手段なのです。

第2章

ここでのテーマに関する私の意見について最も関連のある著書は The Four Nobel Truths of Wealth: A Buddhist View of Economic Life, by Layth Mat - thews; The Conquest of America: The Question of the Other, by Tzvetan Todorov; The Wisdom of Sustainability: Buddhist Economics for the 21st Century, by Sulak Sivaraksa.

[i] 言い添えておくと、私の編集者であるハーブは（原文において）Other, Broad, Deep and Mutual Impact を大文字にすべきではないと強硬に主張したのですが、どうしてもやめられなかったのです。ハーブ、ごめ んなさい!

[ii] The Four Nobel Truths of Wealth: A Buddhist View of Economic Live, Layth Matthews, Enlightened Economy Books: US, 2014, 66.

[iii] 「他者」の概念の深慮な探求についてはこの書を参照: The Conquest of America: The Question of the Other, Tzvetan Todorov, University of Oklahoma Press: Norman, OK, 1982, 185 onward. See also, Time and The Other, by Emanuel Levinas and Richard Cohen.

[iv] The Conquest of America: The Question of the Other, Tzvetan Todorov, University of Oklahoma Press: Norman, OK, 1982, 130.

[v] Dietrich Bonhoeffer, The Cost of Discipleship, Simon and Shuster: New York City, NY, 1959.

[vi] Mindfulness and Money: The Buddhist Path of Abundance, Kulananda and Dominic Houlder, Broadway Books: New York City, NY, 2002, 73.

[vii] A Responsible Life: The Spiritual Path of Mussar, Ira Stone, Wipf & Stock: Eugene, OR, 2006, xxvii.

ご利用条件

本資料は、一般財団法人社会的インパクト・マネジメント・イニシアチブ（Social Impact Management Initiative: SIMI）（以下「当法人」といいます）が運営するSIMIグローバルリソースセンター（以下「本ウェブサイト」といいます）に掲載されているものです。

本ウェブサイトを利用される前に以下の利用条件をお読みいただき、これらの条件にご同意された場合のみご利用ください。本ウェブサイトをご利用されることにより、以下の条件にご同意されたものとみなします。

なお、以下の条件は、予告なしに変更されることがあります。本条件が変更された場合、変更後の利用条件に従っていただきます。あらかじめご了承ください。

1. 著作権について

本ウェブサイト上のすべてのコンテンツに関する著作権は、特段の表示のない限り当法人および当該資料の原著の作者に帰属しております。そのすべてまたは一部を、法律にて定められる私的使用等の範囲を超えて、無断で複製、転用、改変、公衆送信、販売などの行為を行うことはできません。

2. 免責事項

本ウェブサイトは、社会的インパクト・マネジメントに関連する海外の文献や資料を、日本語に訳しまとめたものを、著者及び出版元の許可を得て掲載しています。本ウェブサイトに掲載されているコンテンツは、あくまでも便宜的なものとして利用し、適宜、英語の原文を参照していただくよう、お願いいたします。

誤りのないようあらゆる努力をしておりますが、誤訳、あるいは、掲載されている情報の使用に起因して生じる結果に対して、当法人関係者及び当ウェブサイトは、一切の責任を負わないものといたします。

当法人は、予告なしに、本ウェブサイトの運営を中断または中止、掲載内容を修正、変更、削除する場合がありますが、それらによって生じるいかなる損害についても一切責任を負いません。また本ウェブサイトのご利用によりご使用者様または第三者のハードウェアおよびソフトウェア上に生じた事故、データの毀損・滅失等の損害について一切責任を負いません。

3. リンクについて

営利、非営利、イントラネットを問わず、本ウェブサイトへのリンクは自由です。ただし、公序良俗に反するサイトなど、当社の信用、品位を損なうサイトからのリンクはお断りします。また事前事後にかかわらず、その他の理由によりリンクをお断りする場合もあります。

4. 資料の引用について

本ウェブサイト上に掲載された日本語まとめ、抄訳及び翻訳資料を引用する際には、出典の著作者名として「一般財団法人社会的インパクト・マネジメント・イニチアチブ（SIMI）グローバルリソースセンター」及び当該資料の原著の著作者名を、併せて明記ください。

なお、引用の範囲を超えると思われる場合は、当法人および当該資料の原著の著作権者に了解を得てください。